アートによる新生ふくしま交流事業

アートで広げる子どもの未来プロジェクト

2023

記　録　集

主催：福島県

事業受託者：認定特定非営利活動法人 ドリームサポート福島

◆この事業は、国内外からお寄せいただいた寄附金をもとに造成された「福島県東日本大震災子ども支援基金」により実施しています。

アートによる新生ふくしま交流事業

アートによる新生ふくしま交流事業は、芸術活動をとおして被災地域のコミュニティ活性化や被災された方々の心の復興を支援する「アートで広げるみんなの元気プロジェクト」、子ども達に創作活動の機会を提供し心豊かな成長を支援する「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」の２つのプロジェクトで構成されています。

それぞれ県内外で活躍するアーティストを講師としてお招きし、アートワークショップを開催しました。

アートで広げる子どもの未来プロジェクト

2023

このプロジェクトでは、知識の蓄積だけでなく、互いの価値観を共有することで、多様性を認める寛容な考え方や新しい価値を創造する力を育んでほしいという想いを込めてワークショップを企画しました。

講師には、本県ゆかりの芸術家のほか、県内外から子どもの発達や教育を専門として活躍するアーティストを招聘しました。

CONTENTS

P2 1 つくって楽しく考える SDGs　講師 松井素子

P6 2 カラフル・コミュニケーション 2023 ―わたし / わたしたちの色、ふくしまの色―　講師 手塚千尋

P10 3 アート＆サイエンス 〈ほんとの空〉に飛ぶイメージ　講師 渡邊晃一

P14 4 ふしぎな生き物図鑑!! ―流木を見立てて―　講師 廖曦彤

P18 みんなのアート作品展 (アートで広げるみんなの元気プロジェクト共同開催)

P20 アートで広げる子どもの未来プロジェクト・アートで広げるみんなの元気プロジェクト関係者共有 活動報告会（ZOOMによるオンライン開催） ―振り返りと可能性―

Program 1

つくって楽しく考える SDGs

私たちが住む地球の温度は、ぐんぐん上がっています。
いらなくなった廃材から、かわいい生き物をつくり、
地球の環境について考えてみましょう。

2023年 9月13日（水）　郡山市　ナーサリールームまんまぴあ本園
2023年10月 4日（水）　郡山市　郡山市立東芳小学校
2023年12月20日（水）　郡山市　岡ノ城保育園



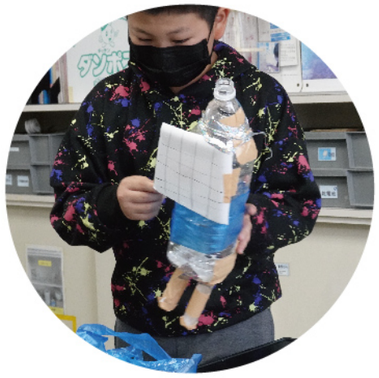


講師 **松井　素子**

環境問題をテーマとするアートワークショップをSDGsと関連させて実施。元小中学校教諭の勤務経験を持ち、現任校では保育者養成に携わっている。

Motoko Matsui





みんなで「危機」にさらされている地球と生き物のことを考えてみよう！

計３カ所で実施したワークショップに共通する思いとして、松井先生は「プラスチックの廃材が環境問題の大きな要因とされていること」「海洋汚染や地球温暖化が進み、生き物が危機にさらされていること」などを知ってもらい、捨てる前に地球や生き物について考えるきっかけにしてほしいという願いを込めました。

ワークショップ当日、松井先生は映像を使って大発生したクラゲの話や、川の水位が下がり絶滅危惧種のアマゾンカワイルカが餓死した話、南極の氷が溶けたことで皇帝ペンギンの赤ちゃんが約一万羽溺死したことなど、危機感をわかりやすく伝えることから始めました。

「海水温の上昇は、海に浮かぶプラスチックゴミも大きな要因になっています。海水があたたかくなるとクラゲが増えます。大発生したクラゲが酸素を大量に使うと、ほかの魚たちがあまり呼吸できなくなり減ってしまいます」「こちらは、南極の氷が溶けたことで、一万羽近いコウテイペンギンの赤ちゃんが溺れて死んでしまったというニュース映像です」。松井先生が指し示す映像に子どもたちの目は釘付けです。





SDGs を学んだ後、廃材を使ってクラゲや クリスマス飾り、環境を守るマスコットを作りました

その後の保育園での作品づくりでは、子どもたちが持参したプリンやゼリー、カップ麺などの容器を使ってクラゲや、クリスマス飾りを作りました。お披露目タイムでは、完成したクラゲを持ってクラゲの動きやかわいさを表現しながら行進したり、クリスマス飾りの中に LED ライトを入れて点灯してみんなで鑑賞したりしました。部屋を暗くして明かりを灯すと、「わあ～！」と歓声が上がりました。

小学校では、松井先生のお話に地球と生き物の危機を知った子どもたちの「動物たちがかわいそう」「このままでは大変だ」という声が聞かれ、SDGs の必要性をこれまで以上に実感したようでした。「環境を守るマスコットを作る」という明確なねらいを定めたことも奏功し、子どもたちは地球と生き物にエールを送るマスコット作りに奮闘しました。

材料は、各自準備したペットボトル、卵の容器、牛乳パック、ゼリーやプリンのカップ、トレイ、ストロー、カップ麺などの廃材です。特にコウテイペンギンの雛の大量死のニュースに衝撃を受けた子どもが多かったことから、作品は海の生き物に関する造形物が多くなりました。「この動物が歩くと木が生える」「温暖化した地球を冷やしてくれる」「海の資源、魚などを増やし、守ります」「海のゴミを取ったり、海面上昇を防ぎます」「南極を守り、このままだとしずむ地球を守ります」など、コンセプトには、しっかり環境問題が反映されています。また、廃材を材料とすることで、残してゴミにすることへの抵抗感が芽生え、なるべくゴミを出さずにすべて使い切ろうとする姿勢も見られました。松井先生のお話をヒントにすぐに作品を生み出せる頼もしい子どもたちは、どんな未来をつくりだすでしょうか。楽しみです。

参加者の感想

- 工作したことがすごく心に残りました。 残ったものをこうしてかわいく作れるんだなと思いました。
- 普段はごみは捨てるので、工作したりするのは、とても楽しいです。



- いらないゴミを使って、こんなにできるんだなと思いました。
- SDG s の 17 の目標を達成できるかは、 地球に住む私たちの責任だと思います

- SDG s のケーキを初めて知りました。
- 作品を作るテーマが楽しそう！と思いました。
- 作ってみて、 時間があっという間でした。



- チンアナゴを飼ううさぎをイメージしました。 楽しかったし、また作りたいと思いました。
- 作品を作ることで「もっとSDG s に取り組もう。」という心が出てきました。

- 自分の作りたい物を作れて良かったし、 楽しかったです。
- SDG s の目標を達成するために、 大切な事を聞くことが出来ました。



- 作ってみて、 時間があっという間でした。
- とても、 おもしろくできました。これをきっかけに SDG s をこれからも、 頑張れそうです。







Program 2

カラフル・コミュニケーション 2023
―わたし / わたしたちの色、ふくしまの色―

わたしたちが暮らすまちでお気に入りのもの・場所・風景などを
色で表し交流します。
私とあなたの「好き」が出会ったとき、どんなカラフルな世界が
広がるでしょうか。
色で「好き」を探求します。

2023年11月16日(木)　郡山市　郡山市立東芳小学校
2023年12月23日(土)　伊達市　福島県立伊達高等学校美術部





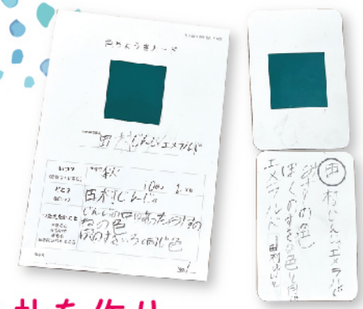
講師 手塚　千尋

ワークショップによる協働的な学び、学習環境デザインを専門とする。色や形の表現による広義の異文化理解を目的としたワークショップを国内外で展開している。

Chihiro Tetsuka







町探検で見つけたとっておきの色で取り札を作り
みんなでカルタ遊びをしながら好きな色を共有

カラフル・コミュニケーションは、「色」を媒体として、地域や私たち自身の色を考えるワークショップです。講師の手塚先生は、色や形の表現による広義の異文化理解を目的としたワークショップを国内外で展開しています。

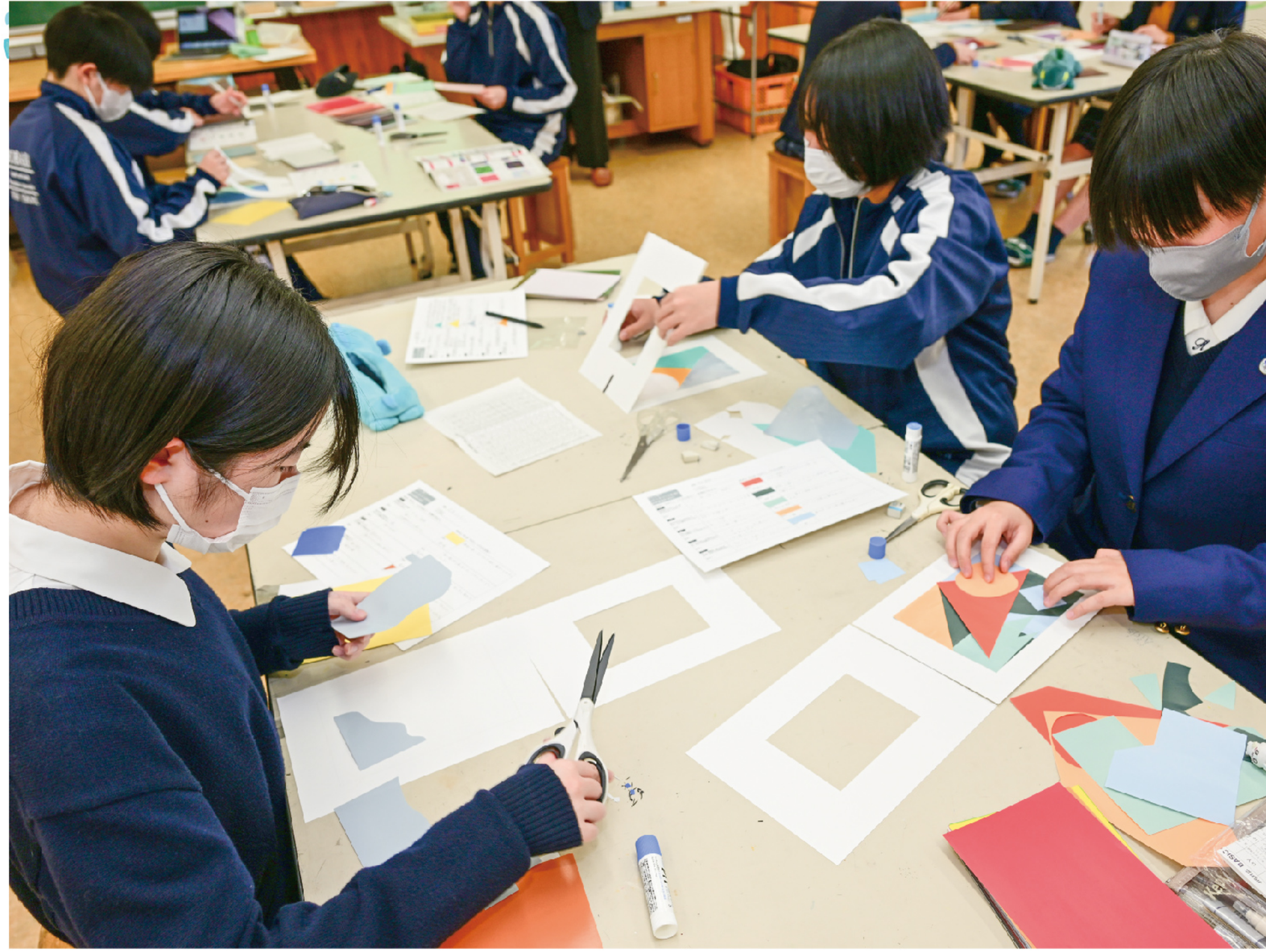
東芳小学校で開催したワークショップ「ぼく/わたしのとっておき!とうほう（東芳）色カルタ」は、日常的に使う色が子どもたちの中で固定化しているのではないかと案じていた担任の先生が、「色の広がりを体験させたい。生活科の町探検と連携させて、自分たちの町をカラフルな色で染めたい」と、申し込まれました。その際、秋の学習発表会で発表する生活科の「まちたんけん（町探検）」を、3回にわたって実施することを聞いた手塚先生は、10月の1コマに参加して、ワークショップに臨まれました。

ワークショップ当日は、神社やお寺、食品工場、美容室などで聞いた話や、自分で撮影した写真などから感じたとっておきの色を考えることから始まりました。決まったら199色の色カードから近いものを見つけて名前をつけ、カルタの「取り札」を作り、さらに「読み札」も考えました。一番盛り上がったのは、言わずもがな、みんなで楽しんだカルタ取りです。「うぐいす ふかみどり　あまなっとう工場のうぐいすまめ…」「朝風グレー…」「こけ石色…」「パーマきいろ…」「田村竹色…」などなど、読み上げると、それを聞いた子どもたちが「この色かな」と思う色カードを取ります。熱気に溢れる教室では、白熱のカルタ取りが続きました。子どもたちからは「ああ、それかぁ」というような声も出て、カルタを介して何となく色のイメージを共有できていたようでした。また、今回のワークショップは生活科、図工、国語など、教科の垣根を超えた総合的な学びとなりました。



文化や自分のアイデンティティとして色を考え深め、表現しました

福島県立伊達高等学校では、手塚先生が用意した色カードから自分の色を見つけて色面構成をする「わたし色/わたしをつくる色」を実施しました。当日は、自己との対話に重きを置き、色の背景にある文化や、色を個人のアイデンティティーとして考えました。初めにワークシートの項目に沿って自分のことを書き出し、続いて互いにインタビューし合いながらさらに深め、その成果を色面構成で表しました。「オレンジは、みんなのぬくもり。白色は自分。みんなに支えられている自分を表しました」「自分に起こった心の変化を表現しました」「紫が好きなので多めに配色しました。明るめがありながらも、暗めもあり、自分の心を表現しました」など、完成した色面構成に添えられた文章は、内面を深く掘り下げてしたためた手紙のようでした。色を通して自分のことや自身と地域とのつながりなどを感じ、深め、表現して発信し、共有するワークは、やはりアートの領域だからこそと強く感じた時間となりました。



参加者の感想

・初めて色で出来たかるたを作りました。

・自分のとっておきの色づくりが楽しかったです。

・色の名前を決めている時に先生が一緒に考えてくれて嬉しかったです。

・自分で名前を付けたり、オリジナルのかるたを作るのが楽しかったです。

・教えてもらったので、色ともっともっと仲良くなりました。

・いろんな色が知れてうれしかったです。色が無限にあると知って驚きました。

・木の上に、竹の葉っぱと、木の葉の葉っぱの組み合わせが、きれいでした。

・カラフルコミュニケーションでは、かるたやいろんなことができて、すごく楽しかったです。

・色々な色や言葉を学びました。同じ色ができるのが難しいと聞きました。







Program 3

〈ほんとの空〉に飛ぶイメージ

空を飛ぶ作品に〈ほんとの空〉を描くワークショップ。
レオナルド・ダ・ヴィンチの「アートとサイエンス」を起点に、
キビタキなどの鳥や植物の種、最先端のドローン、
映像メディアの「飛ぶ」イメージを紹介します。
STEAM 教育※の視点に、福島の文化を取り入れた活動です。

※STEAM（スティーム）教育とは、科学（Science）、技術（Technology）、工学（Engineering）、アート（Art）、数学（Mathematics）の５つの単語の頭文字を組み合わせた教科横断的な教育手法

2023年10月16日（月）	喜多方市	喜多方市駒形地区公民館
2023年11月27日（月）	福島市	福島市立下川崎小学校
2023年11月30日（木）	福島市	福島県立福島西高等学校デザイン科学科
2024年２月17日（土）	福島市	福島県立橘高等学校美術部



講師 **渡邊　晃一**



身体や大地など幅広いテーマで絵画制作や現代美術作品の制作を行い、国内外の展覧会等で活躍中。近年ではレオナルド・ダ・ヴィンチの研究でも注目され、テレビ番組の監修も行う。福島ビエンナーレ、風と土の芸術祭など県内の芸術祭を企画監修。

Kohichi Watanabe



大事なのは自然からどう学ぶか。今回は、『空を飛ぶ』をキーワードに紙飛行機を作りました

全部で4回実施した渡邊晃一先生のワークショップは、前半が小学生、後半は高校生と一緒に行いました。小学校の先生は、申し込む際の思いを「紙飛行機作りを通して、図工だけでなく理科や算数など、いろいろな教科の要素を組み合わせて、使っていく力をつけさせたいと思いました」と話してくださいました。

いずれのワークショップでも渡邊先生は、空を飛びたいと願ったレオナルド・ダ・ヴィンチの話から始めました。「レオナルドは、モモンガの滑空や鳥が空を飛ぶ様子、植物の種が回転しながら飛んでいく様子、風の力を借りて飛んでいく様子などを観察し、飛ぶヒントを得ていました。レオナルドは、『自然を師としなければならない』と言っています。結局、自然からどう学ぶかということが大事なキーなんですね。」

また、紙飛行機については、こんなふうにも話されました。「僕は、紙飛行機を作ることってとても普通のことだと思っていたんです。ところが近年、新聞を購読されない家庭などが増えたことで、子どもたちが自宅でチラシや紙に何か描いたり、折ったり、作ったりして遊ぶことをほとんど経験していないことがわかってきたんですね。風の抵抗とか、重心とかいろいろ考えて折り方や飛ばし方を工夫した紙飛行機の応用編を、自宅で展開して遊び込めるように願いを込めました」



どうしたらよく飛ぶのだろう。工夫しながら飛ぶこと、飛ばすことの楽しさを存分に味わいました

小学生対象のワークショップでは、材料の和紙の歴史にも触れ、福島県内でも漉かれている和紙があること、「まゆみ紙」ともいわれる上川崎和紙は、高村智恵子（画家。彫刻家・で詩人の高村光太郎の妻）の故郷に近い場所で漉かれていること、平安時代に清少納言や紫式部なども使ったと言われていることなども伝えました。高校生には、「アートは問題を提起するもの。デザインは問題を解決するもの」などのお話や、紙の縦横の比率や黄金比など数学的な要素も取り入れて話をされていました。

紙飛行機作りは、折り方の異なるよく飛ぶ飛行機３種類（おへそ飛行機・のしいか飛行機・いか飛行機）のほかにも、高校生は、サイズを変えてビッグサイズの紙飛行機も作りました。飛ばす際には、風を読み捕まえることや、３機を合体させて飛ばす技を伝えると、みんな歓声を上げながら果敢にチャレンジしていました。最先端の機器ドローンを飛ばすと、子どもたちは負けじとドローンに向かって紙飛行機を飛ばしていました。最後に作ったパラシュートも大好評。飛ぶこと、飛ばすことの楽しさを存分に味わったワークショップとなりました。









参加者の感想

- 作るのは大変だったけど、出来たときの達成感がとっても嬉しかったです。
- パラシュートが良く開いた。飛行機が良く飛んだ。
- 紙ひこうきの折り方がこんなにあるのは知らなかったです。
- 科学と絡めて授業をしていることがすごく良かった。
- 紙飛行機や気球を作ることで「飛ぶ」イメージが広がって具体的に考えることができました。
- 芸術と科学、そして数字がつながっているというところに驚きました。
- ダヴィンチがどんな人物だったのか、空に対してどんな願いを持っていたのかを知ることが出来ておもしろく、勉強になりました。
- 試行錯誤して作った紙飛行機を飛ばす時はとてもワクワクし、長く飛んだり回転したりした時はとても面白かった。











Program 4

ふしぎな生き物図鑑!!
―流木を見立てて―

流木を触ったり、色を塗ったり、装飾をしたり、
架空の生き物に見立てて、不思議な生き物プロフィールを作ります。
みんなが見つけた不思議な生き物をどんどん図鑑に入れましょう。

2023年10月13日（金）	相馬市	相馬市立中村第二中学校美術部
2023年11月26日（日）	いわき市	中央公民館
2023年12月26日（火）	いわき市	植田公民館

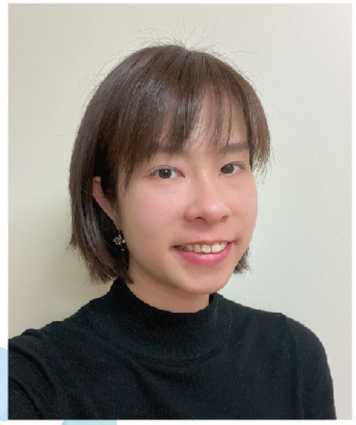




講師 廖（リャオ） 曦彤（シトン）

中国出身の美術家。これまでに日本国内で多くのワークショップを実施。山形大学では幼保ならびに小・中・高校の図工・美術の教師を育成する科目を担当し、幅広い年齢の発達特性を熟知したアート活動に取り組んでいる。

Liao Xitong







最初にたくさんの流木に触れながら架空の生き物に見立てる面白さを味わいました

相馬市といわき市で開催しました。中学校では美術部員が、公民館では保育園児と小学生と保護者の方々が、楽しい時間を過ごしました。申し込む際の思いを中学校美術部の顧問の先生に伺うと、こんな風に話してくださいました。「自然のものを使って作品を作る体験をさせたいと思っていたのと、廖先生のプログラムが身近に海がある子どもたちにぴったりでしたし、外部から先生が来られるというのも新鮮で、生徒たちが喜ぶと思いました。作品を文化祭で展示して、みんなにも何かしら感じてもらえるといいなとも考えました。」

当日は、相馬やいわきの海から拾い集めてきた流木と生の木の違いを触って感じるところからスタートしました。「ツルツルしてる」、「軽い」、「中が空洞」などなど、子どもたちはいろいろなことに気がつきます。廖先生が作った見本を見てイメージをつかんだら、たくさんある流木の中からちょっと気になる形のものや、好きな手触りのものを見つけて構想を練ります。ひっくり返したり、上下逆さまにしたり、いろいろな方向から眺めて「ここは目かな」、「ドラゴンみたい」、「蛇にしようかな～」など、考えていたと思いきや、下描きもしないまま顔や手や足を直接描いていく子どもたち。やがて手のひらに絵の具をつけて手で塗りたくる子ども現れたりして…。流木をつなげて長くしたり、表と裏と全く違う表情を描いたり、1本の流木に3つの顔を描く子どももいました。



空想の世界に浸ること約２時間。
奇想天外な生き物情報をお披露目タイムで共有

不思議な生き物が出来たら名前を付けて発見地、特徴、好物などを考えて、図鑑用の台紙に書き込んだらミッションコンプリート。いよいよ調査票の共有タイムです。「名前:未定、特徴:常に空にいて、食べなくても生きていける。不老不死である」、「名前：ダルメシアンの犬と喜哀楽の魚。特徴：感情が変わるときに姿が変わる」、「名前：夕日のブタ。発見:白土公園。好物:草、夕日の時に出てくる」、「名前：にゃーこ※探しています。性格：のんびり、気まぐれ。大きさ：38㎝。重さ：りんご1個分」など、奇想天外、多種多様な生き物をみんなで共有しました。

廖先生に振り返りをお願いすると、「自分の考えがちゃんとあって、頭の中にある生き物の姿が色を通して浮かび上がってくる様子に感動しました」と話してくださいました。「形を決めつけるのではなく、流木の中の生き物が作る人との対話を通して、『私(生き物)ってこんな感じだよね』みたいなものが見えてくるのを、体験してもらえたと思います」とも。参加された皆さんからは、「充実した時間を過ごせて楽しかった」、「いつもと違う体験ができた上に、自分らしい作品を作ることができた」等の声をいただきました。



参加者の感想

- 自分でオリジナルの生き物を考えるのは面白かったです！
- 初めて木に絵の具で描いて、とても新鮮でとても楽しかった。
- 流木から生き物を想像するのが難しかったです。楽しく活動できました。
- 子どもたちと楽しい時間を過ごす事ができました。最高の作品ができました！！（保護者）
- 子どもと一緒に作品を作り上げていく楽しさを改めて認識した。（保護者）
- 様々な生き物を見つけることができてとても楽しく参加することができました。子供の想像力はすごいな、と思いました。（保護者）
- 初めて流木を使った作品だったけど、自分らしくかわいい作品を作ることが出来ました！
- 家では出来ないことなので、大人も子供も楽しかったです！（保護者）











アートによる新生ふくしま交流事業
「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」「アートで広げるみんなの元気プロジェクト」

みんなのアート作品展

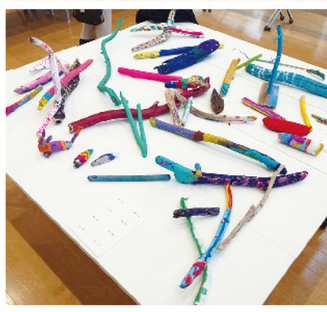
アートで広げる子どもの未来プロジェクト・アートで広げるみんなの元気プロジェクト
県内外で活躍する10名の講師とともに創り上げた参加者の作品を展示しました。

2024年1月23日（火）～1月25日（木）　会場：会津稽古堂市民ギャラリー（会津若松市）

2024年3月13日（水）～3月17日（日）　会場：郡山ビッグアイ 市民ふれあいプラザ（郡山市）














会場のアンケートから

- 全ての作品づくりに生き生きとした参加者の表情、素敵でした。生きる力が感じさせられました。
- 子どもの自由な発想にビックリしました。
- 大人は上手く作っていますが、子どもさんは自由に常識に、はまらない作品で素晴らしかったです。
- 参加者の年齢の幅が広く、素材等も自由な感じだと思いました。
- 小学生の色かるた。何色でも子供たちは思い浮かんでいて、大人で思いつかないものがあり子どもの凄さを感じた。
- 全体的にインパクトがあって良かった！！
- これからも、多くの作品にふれあって、芸術性をもっと育んでいって欲しいです。
- ペットボトルアートがとてもいい。ゴミじゃない。
- SDGsの作品、学校へ広めたいです。
- 様々な表現を作って豊かな感性や個性を感じる作品展でした。
- この様なワークショップを行っていることも、様々なアートがあることも初めて知って新鮮でした。
- 安心して語り、考え、表現する居場所と時間があるって良いですね。
- どの作品も素晴らしかったです。アートの力を感じました。
- これからも、多くの作品にふれあって、芸術性をもっと育んでいって欲しいです。
- 何でもアートになるんだなぁと思いました。
- 見ていてとても楽しく、私もまたやってみたいと思いました。
- 各々の活動が個性的で元気になります。
- 専門の先生から直接教わることがないので良い体験だと思う。

ZOOMによるオンライン開催

アートで広げる子どもの未来プロジェクト
アートで広げるみんなの元気プロジェクト

振り返りと可能性

関係者共有活動報告会

2024年3月17日(日)13:00〜15:00

2023年度に福島県が実施した「アートによる新生ふくしま交流事業」の取り組み「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」&「アートで広げるみんなの元気プロジェクトのワークショップ」を振り返りました。講師の皆さん、関係者の方々にご参加いただき、アートを通して心の復興、子どもたちの心豊かな成長をどのように支援して行くことができるか考え、可能性や願いなど伺いました。



教科を横断する授業

小学校で実施した町歩きをして自分の好きな色を見つけてカルタを作り、みんなで楽しむワークショップを見学にこられた郡山市の小野教育長の感想をお伝えしたいと思います。社会の授業でもあり、アートを絡めているので図工でもあり、カルタということで国語でもあり、教科を横断する総合的な学習になっているということで、良い事例になったんじゃないかとおっしゃっていました。私たちが次に何か企画を考える際には、こんなふうに教科を横断するようなワークショップができたら良いのではと思いました。

（事務局　菅野真）

一緒くたにして考えることの重要性

すべての教科を横断していくということを考えています。「つくって楽しく考えるSDGs」も生物や理科、生命尊重という道徳の分野にも絡みます。そういう意味ではSTEAM教育なのかなというふうには感じました。小学校に入学する前の子どもたちは、すべてを一緒くたに学んでいます。小学校に入ると教科に分かれていきます。それぞれ学びやすくカリキュラム化、体系化されていますが、もう一度STEAMで、それぞれの段階で領域横断というか、一緒くたにして考えることの重要性が、すごく今回学べてよかったと思っています。

（松井素子さん）

実感の伴う理解にアートの力を再認識

実は、領域横断は、あまり意識していませんでした。たまたま生活科の「町探検」からのつながりでワークショップをデザインすることになったと。今回、なるほどなと思ったのが、町を自分と関連づけて理解するって、町歩きの次のフェーズなのだということです。まず町に何があるのか調べる、それを歩いて見つけて分かる、さらに次の段階で自分がそこで生活していることを実感すると。実感が伴う「理解」に落とし込むときにアートがすごく有効なんじゃないかと思いました。ワークショプでは、「自分のお気に入りを見つけてみよう」という文脈を与えたことで、町への愛着や、その町で生きるということを自覚したり確認していました。そしてカルタの読み札に自分の言葉で説明するときに、もう一段階深く考えていて。アートは、自分事に落とし込んで(再)表現するプロセスとして、すごく意味があるんだなということを改めて思いました　（手塚千尋さん）

キーワードは自然。自然を中心に

地震や津波もありますが、原発という人間が作ったものに対する考え方を対峙的に見ながら福島の復興を考える時、自然が中心にないとだめだなと僕は思います。やっぱり自然を基本にしないと。文系、理系という枠組みの中でものを考えるような思考を持っているのは日本だけです。米国やフランスに行くとそうした枠組み自体がない。何があるかというと自然や文化なんです。東京にあるものを見せることの価値は、あるのだけれども。福島の子どもたちは、自分たちの地域や自然と向き合いながら発信していく。それも世界に発信していくぐらいの勢いで私たちも福島の子どもたちと作っていかないと…。アートとサイエンスという対峙は、常に大地や地域、文化とつながる形でおこなっていくことが大事。僕はそんな考え方です。

（渡邊晃一さん）

流木を拾い関わり海に返すまで

渡邊先生に私も共感します。そもそも人間の活動って自然に人の痕跡を残すこと。抽象的ですが人が流木を拾うのも、砂浜が流木を磨くことも、流木にアプローチするという点で共通しています。子どもたちは、流木を触ることで、自然との関係性ができます。色を付けたり、くっつけたり、意味を見出したりして自分の痕跡を残す。時間の制限もありますが、またチャンスをいただけるのであれば、流木を拾い集めて、アーティストの活動をして、再び海岸に戻すところまでできたらと思います。例えば、50年海岸にいた流木との対話を通して、ここでどういうことが起きていたのかとか…歴史を感じるといいますか。人間としてここに生きた証明みたいな痕跡を残す活動を子どもたちとできたらと思います。

（廖 曦彤さん）

参加者の思いが伝わる解説文

流木を見立てるということで、子どもたちとお父さんお母さんに、普段使わない脳みそを使ってもらおうと考えて申し込みました。当日は、親子間の協力ではなく、一人ひとり自分の作品を作りました。特に感動したのが、不思議な生き物の名前や生態、特徴などを書いていただいた調査票を読んだ時です。大人も子どもも、みなさんがそれぞれに日頃から環境について考えていることや、それぞれの思いの深さが伝わってきて、今も心に残っています。制作が終わってからみんなで話をする時間をもっと取るなど、時間をかけて取り組みたいワークショップだと思いました。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

（いわき市中央公民館　吉田謡生さん）

アートによる新生ふくしま交流事業「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」2023

制作・編集　認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島
デザイン　有限会社デザイニングマーブル

主　　催　福島県
事業受託者　認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島

【お問合せ】
認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島
福島県福島市三河北町2-8 Coco Mezon1階B室
TEL 024-563-1955　FAX 024-563-1955　E-mail info@f-jdi.com